

月刊

インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

財団法人 日印協会 （日印間の政治・経済・文化交流に努力して 104 年）



日印交流年最大のイベント『ナマステ・インド 2007』の会場風景

（佐伯 健三氏撮影）

目次

ナマステ・インド 2007	p. 3
駐インド特命全権大使の交代	p.11
インドニュース	p. 12
杉並区日印交流年記念フェア	p. 13
路上の子供たち 1 ルピーの重さ 思い悩んだこと	p. 13
新刊書紹介	p. 16
日印貿易概況掲示板	p. 17
掲示板	p. 18

1. ナマステ・インディア2007

今年、1957年に日本とインドが日印文化協定を締結して以来、区切りとなる50周年を迎え、両国の各地で文化交流事業が数多く催されている。その中で、最大のイベントの一つ『ナマステ・インディア 2007』が9月29日(土)と30日(日)の二日間にわたって、東京都代々木公園イベント広場(メイン会場)及びたばこと塩の博物館(第二会場)にて盛大に催された。インド政府と日本政府、並びに関連の団体、企業、ボランティアの強力な後押しを得ての開会であった。

財団法人日印協会も、全体イベントに後援し、特に、第二会場であるたばこと塩の博物館で、同博物館と共催で日印交流年記念講演を実施した。

二日間とも雨に見舞われたが、『雨にも拘らず、大勢の参加者』と言うべきなのか、『生憎の雨のため、予想を下回る人出』と考えるのか、主催者側としては微妙な判断ではあろうが、編集者としては、多少の雨も気にせず、熱心なインドファンが多数集まり、心強い限りであったとの印象を持った。主催者側は10万人の人出を期待していたが、公式参加人数はまだ公表されていないものの、熱のこもった、活気あるインド祭であったと思っている。

駐日インド大使館のシン大使ご夫妻を中心に、日本政府関係者と近隣、関連からの各国大使夫妻が駆けつけ、インド伝統舞踊、音楽などを大いに楽しまれた。また、目玉の一つである、インドレストラン、物産展など沢山の入でにぎわい、カレー店では一部売り切れ御礼も出ていた。



ナマステ・インディア 2007 のパンフレット



入り口近辺の会場風景 (佐伯氏撮影)



会場風景 (佐伯氏撮影)



開幕直後の入口 (日印協会理事鹿子木氏撮影)



インド料理を満喫し、満面の笑みで談笑する参加者 (佐伯氏撮影)



インドカレーを求めて長蛇の列 (佐伯氏撮影)



口一杯にほうばる本場インドのカレー (佐伯氏撮影)



駐日インド大使館 シン全権大使ご夫妻
(佐伯氏撮影)



インド大使を囲んでの各国大使夫妻(佐伯氏撮影)



インド伝統舞踊(パンジャブ州のバングラ民族舞踏)
(佐伯氏撮影)



日本人ダンサーによるインド伝統舞踊(佐伯氏撮影)



故郷のインド舞踊に酔いしれるインド人(佐伯氏撮影)



日印協会ブース(左より、原理事、笹田事務局長、長田主任、退任した佐々木前専務理事)

ナマステ・インディアの写真については、プロの写真家 佐伯健三氏(日本写真家協会会員)に、多くの写真を提供頂いたので、ここに感謝の意を表すると共に、ご報告いたします。

日印交流年記念講演

日印協会とたばこと塩の博物館の共催による、日印交流年記念講演は、各界の専門家を招いて二日間 4 講演に亘って開催した。インド発祥の文化、インド独特のお祭りにまつわる写真集、『ムトゥ・踊るマハラジャ』に代表されるインド映画のダイジェスト版と解説、近年著しい発展を見るインド経済とそれを支える海外移民のインド人の役割などを多岐に渡る話題を提供頂き、新たなインドの発見があったのではないかと思います。

記念講演の要旨を以下に記載するが、『インドの祭り』と『最近のインド映画事情』は映像を中心にしているため、講演内容は省略します。

『インド文化の源流と底流を求めて - インダス文明とインドの民俗文化』

講師：小西正捷（こにし・まさとし）先生 立教大学名誉教授・日印協会理事

プロフィール：1938 年生まれ。1961 年、国際基督教大学教養学部卒業。1961-64 年、インド政府招聘留学生としてカルカッタ大学大学院に学び、修士課程(考古学)修了。帰国後 1971 年、東京大学大学院博士課程(文化人類学)単位取得退学、法政大学・立教大学勤務を経て現職。留学時以来インド文化の古層・基層の究明に関心をもち、1964-65 年にアフガニスタン・パキスタンで発掘調査をして以来、インド文化の源流としてのインダス文明、底流としての民俗文化の諸相、ことに民俗儀礼・芸能・造形に関する実地研究を行なう。フィールドワークの軌跡は、西はアラビア湾岸地域から東はネパール、バングラデシュに及ぶ。主な著書に『アフガニスタン』、『インド民芸 - 民俗のかたち』、『多様のインド世界』、『インド民衆の文化誌』、『ベンガル歴史風土記』、『インド民俗芸能誌』など。その他、編著・共著・訳書等も多い。最新刊に沖守弘氏と共著『知られざるインド - 儀礼芸能とその造形』がある。



日印文化協定が結ばれてから 50 年。この半世紀はまた、インドに関わってきた私の半世紀と重なるものでもあった。若き日、インドに留学してまず惹かれたものは、高度な文化・芸術もさることながら、村のくらしにいきいきと遺る多彩な民俗文化の諸相であり、またその淵源が、4500 年も前のインダス文明やそれ以前の文化にあることに深く感動した。それ以来私は多くの村でのフィールドワークを重ね、考古学と民族学を軸にして、インド民衆文化史上の諸相を追ってきた。私事にも及ぶが、その軌跡の一端について触れてみたい。

さて、「なぜインドに？」というのがよく聞かれる質問である。話は 1950 年代半ばにさかのぼるが、当時高校生であった私にも、例の 1955 年のバンドン会議をはじめとするアジア・アフリカ諸国から発せられる熱気はひしひしと伝わってきた。なかでもネルーの活躍は目覚しく、この大国の底力は何に由来するのであろうか、というのが、敗戦に打ちひしがれたかつての軍国少国民であった私の素朴な疑問であった。すでに 1952 年にはインド政府招聘による優れた日本の留学生たちがインドに渡りはじめ、さらに 1957 年、日印文化協定が締結されると次々とインドからの文化使節団が来日した。それまでも私は日本の雅楽・舞楽やアジアの伝統芸能、またその背景となる思想や信仰に関心があったが、その源流ともいべき、数千年にもわたる深いインド亜大陸の文化伝統に深く魅せられた。

1961 年、幸い私もインド政府の招聘を受けてカルカッタ大学への留学が許されることとなり、初めは古代インド文化史料に所属して美術史専攻を試みたが、古典的優品のみが対象となりがちなことや、主としてサンスクリット語テキストに依存してその思想的背景を探る方法に違和感を覚えた。学部時代からの私の関心はむしろ先史時代以来の土偶やその背後の母神信仰にあったから、大学院では考古学科に移籍した。そこでは理論に加え、発掘等のフィールドワークを行なう機会が与えられた。実際に村に住んで村びとたちとの暮らしをともにし、彼らとの交流を深めえた経験は何にもかえがたかったし、また主任教授が、考古学のみならずベンガル民俗学の泰斗であったことも幸運であった。

インドの村でまず私の心を捉えたのは、村の女性たちが米粉で床に描くアルポナという儀礼的床絵であり、また儀礼時に手びねりする素朴な土偶であった。考古学とはいえ、必ずしも土器や石器の精緻な形式分類や編年研究ではなかったのである。したがって帰国後は専攻を民族学・文化人類学に変え、儀礼的造形やそれと関連する民俗レベルでの儀礼芸能を追うこととなった。その成果の一端は、いくつかの旧著のほか、沖守弘氏の見事な写真に支えられた『インド・大地の民俗画』（未来社、2001）と、同じく新刊の『知られざるインド - 儀礼芸能とその造形』（清流出版、2007）にも纏められている。

主として村の女性たちが担い伝える先史時代以来のこのような床絵・壁画や儀礼造形の伝統は今もインド文化の深い基層に底流として脈打ち、しかもそれらの源流は、4500 年前のインダス文明もしくはそれ以前からの遺物にたどることができるものである。のちにパキスタンのバローチスターンなどの遺跡を踏査し、そこに出土する土偶の多くもまた、のちのインドの各地・各時代の土偶を思わせるものであることを見てとって胸を躍らせた。実際、ややあってインダス文明研究に没頭することになるが、そこでは土偶のみならず、他の多くの遺物や遺構が、多様な展開を経てではあれ、のちのインド文化・社会の諸相の原型をなしていることを見出しえた。その一例をあげれば、中庭を中心として部屋が取り囲む家の構造は大家族制を、また集住する工人の工房はいわゆるカーストの萌芽を思わせる。輻(や)をもたずに一枚板の車輪をつけた牛車は今も村を走り、少女たちは細い墨壺を使って眼に隈を入れる。陶工の彩文土器も先史時代の伝統を受け継ぎ、スパイスを擦るすり石や石皿もパーザールで手に入る。また村の家屋の土壁に描かれた華麗な壁画に眼を転ずれば、そこには先史時代の岩陰画にすらさかのぼる、豊かな部族文化との関連も見出されよう。

このようにインド文化の底流と源流は基層において深く結びつき、これまでないがしろにされてきたインド文化史上の大きな問題を突きつけている。ともすれば「民芸品」とか「芸能・歌舞音曲」として軽んじられがちな分野であるが、輝かしきインド古典文化の一方に横たわる、より広くて深い基層文化の諸相をこれからも深く鋭く探っていきたい。

『インドの祭り』（スライドとお話）

講師：沖守弘（おき・もりひろ）先生 日本写真家協会会員 二科会会員

プロフィール：1929年京都生まれ。近畿大学商学部卒業。1954年に日本写真コンクール特選に選ばれ、プロの写真家の道を歩む。舞鶴引揚船、ブラジル移民船、スラム街などをレンズを通して鋭く描く。1974年に、インドの人口問題の取材で訪れたコルカタで、マザー・テレサに出会い、彼女の献身的な活動に深い感銘を受け、以後、マザー・テレサの『家族や隣人を愛することから平和が始まる』の高遠なメッセージを世界に投げかけている。マザー・テレサは1979年にノーベル平和賞を受賞したが、それまでの彼女の献身的活動を貴重なフィルムに記録に残しており、高く評価されている。彼女の没10年の今年、『彼女の言葉を残していくことが自分に出来る恩返し』との思いで、写真展を開いた。テレビでもこの思いが放映されている。

著書と写真集に、『マザー・テレサ あふれる愛』、『マザー・テレサ 愛はかぎりなく』、『マザー・テレサと姉妹たち』、『インド・大地の民族画』など多数。また、前半の講師の小西先生との共著で、『知られざるインド』を最近発行された（詳細は別項参照）



今日、大多数のインド人の信奉している宗教は、ヒンドゥー教に他ならない。従って、ヒンドゥー教を知らずして、インドの心を理解することは出来ない。しかし、ヒンドゥー教の世界を一言で明確に定義することも出来ない。そこで私は、インド各地で催される代表的なお祭りの取材を通してヒンドゥー教を理解するように努めた。今回はこれらヒンドゥー教のお祭りとインド固有の宗教であるジャイナ教のお祭りも紹介する。

『最近のインド映画事情』（ビデオとお話）

講師：松岡環（まつおか・たまき）先生 アジア映画研究者 麗澤大学と国土舘大学非常勤講師

プロフィール：大阪外国語大学ヒンディー語科卒業。1972年から20年間東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所職員として働く傍ら、インド映画を日本に紹介。インド映画祭実行委員会事務局長として、1983年、85年などに『インド映画祭』を数度に亘り開催した。退職後はアジア映画交流史を研究の中心に捉え、香港等中国語圏の映画から東南アジア、インド、さらにイラン、韓国も含むアジア全域の映画の紹介と交流史の研究を続けている。非常勤講師として大学で『アジア映画史』『インド映画史』等を講じているほか、インド映画を中心に字幕も多数担当。また、1978年にはインド文化交流センターを設立、友人3人と月刊ミニコミ誌『インド通信』の発行を続けている。

著書は、『アジア・映画の都 香港～インド・ムービーロード』、『インド映画の百年史』、『ハリウッドに対抗するインド映画産業』等、多数。『ムトゥ踊るマハラジャ』などの字幕でも、多数の作品あり。



(鹿子木氏撮影)



(鹿子木氏撮影)

2006年は1091本という史上最高の映画を製作したインド映画界。もちろん、世界一の製作本数だが、毎年「ナマステ・インド」の講演では、この1年間のインド映画界を振り返りトレンドや変化を分析、解説している。2006-2007年も話題は豊富。『ドン』等リメイクや続編の製作が多いのはなぜ？ ラジニカーント主演作『シヴァージ』が北インドでもヒットした理由は？などの解説を中心に映像もまじえながら、詳しく解説。

『躍進するインド経済とインド系移民』

講師：古賀正則（こがまさのり）先生 一橋大学名誉教授

プロフィール：東京大学数物系研究科地理学博士課程中退。日本福祉大学大学院教授を経て、現職。途上国経済開発論、特にインドの社会・経済論、経済地理学、国際的移民と移民政策、環境と開発、特にインドにおける経済開発と環境政策を専門とする。独立以降のインドの社会・経済的發展過程を地域的差異に注目しつつ明確にすること、インド系移民の動向と、それがインドの政治、経済に及ぼす影響、インドの環境問題と環境政策を NGO 活動と関連させながら明確にすることなどを研究テーマとしている。

著書は、『国際的な移民の動向とインド系移民』、『ブレントのインド系移民』、『インド系移民の国際的ネットワーク』など、多数。



(1) インドの急速な経済成長

- ・ BRICsの一員として注目されるインド：03年10月ゴールドマンサックス社のグローバル・エコノミックスに発表された論文に明記されており、以来中国の2桁台という驚異的な経済成長と共に、それに迫るインドの急激な経済成長に多くの関心が寄せられるようになった。
- ・ インド独立以来、最大の急激な変化：インドの急激な経済成長をもたらした直接的な原因 - 1991以降の経済政策の大きな転換、即ち経済自由化政策、若い国インド - 人口のピークはインドでは2045年、中国では2010～2015年。その背景として、社会主義経済体制の崩壊、全世界的経済統制の進展、いわ

ゆる正解経済の急激なグローバルゼーション、Y2K問題を契機とするIT関連アウトソーシング世界経済の急激な発展などが、顕著な変化だ。急激な経済成長はインド社会に大きな変化を呼び起こしている。大型ショッピングモールや高級マンションの出現、食習慣や服装、さらに価値観の変化 - ファーストフード、消費者金融、中間層の増大、2~3億人の富裕層の出現など今までにない顕著な変化だ。

・ インド経済をけん引するIT産業:インドの急激な経済成長を引っ張ってきたのはIT産業だ。そのGDPへの寄与率は1997年度の1.2%から2006年度には5.4%に増大している。雇用者総数では約160万人を創出している。インド最大の輸出産業であり、IT産業によるサービス輸出額は2006年度で313億ドル、商品輸出総額の約40%にも匹敵している。

(1) 世界の移民大国インド

・ インド系移民の概要とその歴史:インド系移民数は約2500万人で、その大半が移住先の国籍を取得している。インド系移民の割合が住民の約半数、或いはそれ以上を占めているところさえある(モリシャス59.8%、ガイアナ51.6%)。インド系移民が大量に海外に出掛けるようになったのは、1833年のイギリスの奴隷制廃止以降のことである。さらに第二次世界大戦後、欧州諸国へ労働者として移住している。1972年のオイルショック以降、中東諸国への出稼ぎ労働者が急増した。

・ 変化するインド系移民:第一世代(労働者、小売業商人、コーナーストアの店主、タクシー運転手、パテールズ・モテルなど)、第二世代(公認会計士、医師、コンピューター技師、弁護士、大学教師、大企業幹部[hotmail創始者のS・バティア、サン・マイクロシステム共同創始者のV・コースラー、ベル研究所会長のA・トラヴィア、シティ・バンク会長のV・メネズ、ヒューレット・パッカート総支配人のR・グプタ)、大富豪[世界の鉄鋼業界に君臨するL・ミッタル、石油、金融、テレコム業界に君臨するヒンダウジャール族、カパル・グループのストラジ・ポール]などが世界に飛び出している。インド系移民は三つのタイプに分類できる。即ち、(1)未熟練、半熟練労働者の出稼ぎ移民、(2)高学歴で高度の知識や技術を持つ専門家や技術者、研究者、(3)家族呼び寄せや婚姻による移民。NRI(Non-residential Indian)、PIO(Persons of Indian Origin)-三種類のPIO、インドのパスポート保持者、三世代前が1935年当時の英領インド生まれの者の子孫、インド市民や上記PIOの配偶者などのさらに分類できる。

・ インド系移民とインド経済:資金、知識、技術、豊富な人材を元に、インド系移民の投資、外国資本投資の総額の1/4を占め、インドの送金受取額2004年は217億ドルに達し世界最大となっている。GDPの3.1%(中国では1.3%)である。ちなみに同年の外国直接投資額は46.7億ドルで倍近くがインド系移民による。最近見られる新しいタイプの人の移動は、高学歴、高度の知識や技術を持つ人々の短期的、循環的移動、とりわけ頭脳還流の増加が特徴的である。

(2) インド経済の今後の課題

・ 最近の経済成長の限界:ITを利用した、アウトソーシングによるサービスの輸出、即ち一般的には通信手段の発展により、情報交換がより迅速に、より安価に出来るようになったこと。特にインドにとっては、英語使用人口が多いこと、地理的位置の有利性(時差利用)があり、経済を支えつつある。アウトソーシングにより提供されるサービスの中身、多種多様、極めて単純な肉体労働に近いものから研究・開発まで、そしてBPOからKPO(Knowledge Processing Outsourcing)(市場調査、投資調査、パテント管理、R&D、法務、分析サービス、アニメーション・デザイン)への変化が大きい。インドは年間約40万人のエンジニアを創出している。ITの他、90年代末IIIT(Indian Institute of Information Technology)を設立した。しかし大都市ではIT産業の件費年率10%程度で上昇しており、他方アウトソーシングの国際市場において拡大しつつあるものの多くの国の新規参入で競争激化、ヨーロッパでは近接地域(アイルランド、スペイン、東欧諸国など)へのアウトソーシングが拡大しているため、サービス料単価の低落傾向、経営圧迫を強いられている。労働力・知識集約産業ゆえに合理化や効率化には限界がある。また、関連産業の欠如、波及効果に限定性もあり、問題となってくる。

・ 地域間・階層間格差の拡大:地域間格差はまず何よりも都市と農村、大都市と地方都市との間で生じている。多種多様の言語、文化の違い、識字率の差異、パソコンの普及率の差などに大きな開き。

・ 農民の国インド:GDPに占める農業の割合は急激に低下しており、現在20%強に過ぎない。また、勝手は輸出品の約70%が農水産物であったが、今は30%に過ぎない。従いインドは最早農業国とは言えないだろう。しかし、就業人口の60%は依然として農民で、人口の70%は農村に住む。農業人口比率は低下しつつあるとは言え、絶対数は増加傾向。他方、農地拡大は頭打ちになっており、その結果農業経営は零細化している。農業労働者の増加、雇用問題の深刻化、農民の自殺増加の問題、土地問題など多くの解決すべき課題が山積みされている。

2. 駐インド特命全権大使の交代

駐インド特命全権大使の、榎 泰邦大使が 3 年 10 ヶ月に及び日印関係の発展に多大な貢献をされましたが、今般任務を終えられ帰国されました。後任には、駐イラン特命全権大使の 堂道 秀明大使が任命されました。

堂道大使のプロフィール：

堂道秀明（どうみち ひであき） 昭和 23 年 12 月 14 日 石川県生まれ

昭和 46 年 09 月	外務公務員採用上級試験合格
47 年 03 月	東京大学法学部卒業
47 年 04 月	外務省入省
63 年 07 月	中近東アフリカ局アフリカ第二課長
平成 02 年 12 月	欧亜局東欧課長
08 年 01 月	在エジプト大使館公使
08 年 07 月	大臣官房総務課長
11 年 09 月	在インドネシア大使館公使
15 年 08 月	中東アフリカ局長
16 年 07 年	在イラン特命全権大使
19 年 09 月	在インド特命全権大使

なお、両大使の歓送迎会を、日印協会と日印経済委員会との共催で、2007 年 10 月 31 日 12:00 より、千代田区永田町の憲政記念会館にて開催いたしますので、ご参集下さい。両大使の他、日印友好議員連盟の諸先生と外務省、経済産業省の関係者、経済界の方々も出席されますので、簡単な立食ビュッフェスタイルの昼食をはさんでの歓送迎会に、是非ご参加ください。

詳細は別途連絡しておりますが、情報未入手の方は、日印協会事務局までご照会下さい。

3. インドニュース

07 - 08 年度のインド経済成長率は 8.5% ~ 9% 超

インド政府や各経済研究所、経済紙などの発表によれば、概ね上記の経済成長率が望めると公表した。物価上昇率が予想を下回っており、ボンベイ証券取引所の SENSEX も順調に伸びており、不安要素が余りない。しかし、貧困層を救済するには 15% 以上の成長率が必要との声もある。

ソニ観光大臣が来日

9 月中旬に東京で行われた、JATA 世界旅行博 2007 に来日し、インド政府も日本旅行社のインドへの誘致の絶好の機会と捕らえ、種々のセミナーにて PR を推し進めた。インドと日本は今年が日印交流年の記念すべき時であり、一層の観光推進の意欲を表明した。日本人観光目的地として、遺跡、文化、アドベンチャー、ビーチリゾート、医療、アユルヴェーダなどの健康と癒しを強調した。また、近い将来にはオリンピック開催地として、立候補する計画がある。

7 月の自動車販売台数

インド自動車工業会の発表によれば、7 月の乗用車販売台数は 90 千台で前年同月比 11.2% 増となった。今年度の累積値でも 365 千台で 12.3% 増である。代表的なカーメーカーの動きは(単位は千台と%)

	台数	%
BMW	0.1	147.5
マルチウドヨグ	45.1	20.2
現代	14.9	-7.4
タタモーター	13.7	-5.8
フォード	2.5	-13.0
フィアット	0.5	332.7
GM	3.0	158.6
トヨタ	0.6	15.5
ホンダ	4.3	-19.6
ダイムラー	0.2	18.4

この市場に、ボルボが参入し、また日産モルノーと合併会社を設立して参入した。ボルボは高級セダンを販売ターゲットにしており、日産はチャンナイベースに生産拠点を設け、2008 年にオープンする。

ソフトウェアエンジニアの給与上昇

インドでのソフトウェアエンジニアの給与が年率で 10% 以上上昇している。IIT や一般工学系大学からエンジニアを数多く創出しているにも関わらず、この分野の人材不足が指摘されており、IT 企業の人材確保が激しい。給与面での優遇で獲得する常套手段ではあるが、深刻な問題だ。ただ、IT 企業に職を求めた人材は仕事に対する満足度は相当に高い。

インドでピザが人気

ビジネスライン紙によれば、インドでのピザ消費量は月間 300 万食で今後 4 年間に倍増する見込み。売上は 120 億ルピーと言われ、インドファーストフード市場の 50% を占める。主流はドミノピザとピザハットだ。インド食事情として、チャパティーとライスにカレーの文化であったが、若年層の社会進出に伴って、このようなファーストフードが流行するのは隔世の感。

日本がインドポリオ撲滅に協力

日本政府は「インドにおけるポリオ撲滅計画」に 2 億円強の無償資金協力を行う。世界でポリオ撲滅活動が着実に進展する中、南アジアとアフリカが極端に遅れている。インドはポリオ野生株残存の 4 カ国のうちの一つ

で撲滅活動に躍起となっている。インド人口は 11 億人を超えるが、5 歳以下の児童だけでも膨大な数であり、ワクチン投与の継続がなかなか難しいのが現状だ。この窮状に対して日本政府からの援助は大きな救いとなる。日本からの援助により、5 歳以下の児童への全員のワクチン投与が可能となる。

前世療法が人気

タイムズオブインディアによれば、先ごろバンガロールでカンナダ語を話すヒンドゥ教徒の家族に生まれた 5 歳の子供が突然流暢なウルドゥ語を話し始め、この子の前世はイスラム教徒だったのではないかと話題を呼んでいる。インド人特有の「輪廻転生」の観念の表れだ。「人間の魂は永遠であり、肉体だけが移り変わる、前世療法はその魂を前世の記憶にまで退行させることが目的」と前世療法を行っている医師が強調。

JAL インド路線需要好調

JAL は 10 月 28 日より、デリーへ週 7 便のフライトを就航させるが、需要は堅調のようだ。インドへビジネス出張する需要が多く、乗客の半分はビジネス客と見込まれている。

4. 杉並区日印交流年記念フェア

杉並区はチャンドラボースの遺骨を区内の連光寺に保存しているなど、インドに縁の深いところだが、今年の日印交流年記念の年に、日印協会と共催で、もっとインドに親しもうとの趣旨で記念フェアを開催する。

11 月 15 日から 20 日まで、セシオン杉並で行われるが、各種のイベントの他、インドとの友好関係に関する写真展も同時開催される。

詳細は、同封のパンフレットを参照下さい。



5. 路上の子供たち 1 ルピーの重さ 思い悩んだこと

日印協会理事の国際基督教大学 近藤教授の門下生である、女子大生が卒論研究のためにコルカタへ出掛けた。そこで何を感じたのか、若い目で見たインドを語ってもらった。

インド人、或いはヒンズー教を基盤とした生活規範を、彼女が肌で感じた基本的な問題として指摘している。しかし、これは日本人の常識からして問題視しているのもあって、インド人側から言って本質的な問題ではない。我々日本人には永遠の課題と映るが、永いインドの歴史の中にあって、政治、宗教、経済、文化、歴然として残るカースト制度に支配されている社会生活が複雑に絡んだインド社会で、将来どのように変わっていくのであろうか、変えようとしているのであろうか、変わっていくのが望ましいことなのだろうか、改めて考えさせられる。僅かな滞在期間に感じ取った若さの感性は、経験だけでは割り切れない素晴らしさがある。

来年 3 月に大学を卒業し、社会へ旅立つが、この経験が彼女にとって限りなく貴重なものであったことを祈る。



筆者の宮田さん サリーがとても似合う



ボランティア活動として滞在した地区の子供たちと撮影

路上の子どもたち 1ルピーの重み 思い悩んだこと

～インドの格差社会を肌で感じて～

国際基督教大学教養学部国際関係学科4年 宮田ひとみ

インド再訪。わずか1年で実現してしまった。去年の夏は、現地 NGO でのインターン。今回は、卒論研究のため。そんな表向きの渡印目的はおいておき、私はスパイス(刺激)溢れるコルカタの街のとりこである。“インドへ行ったら、ハまるかムリか、どっちかだ。”よく耳にする言葉だが、私は嬉しいことに前者となったようだ。大好きな本場のカレーや、街の人々とのちょっとした“闘い”、チャレンジとハブニングだらけの生活等、日本では経験できないような刺激を浴びることが好きなのは、言うまでもない。

しかし、私がこれほどまでにインドに刺激を与えられてきた最も大きな要因は、間近に存在する貧困問題、格差社会問題ではないだろうか。無論、日本の社会にも、貧困問題、格差問題はある。しかし、普段生活する分には、簡単に忘れてしまう。極端に言えば、貧困について何も思い悩まなくても暮らしていける。しかし、インドでは、どこへ行っても格差というものを感ぜさせられない時はない。私が滞在中に直接関わったのは、実はほとんどが、いわゆる富裕層の人々。それなのに、彼らと並んで街を歩けば、まるで景色の一部のように当たり前に見られる路上で生活する人々。或いは、その日の食糧のために汗水流す労働者の人々。タクシーやバスやリキシャやオートリキシャに乗れば、道路沿いに、橋の下に、川岸に、もう至る所に見られる、掘建て小屋やスラム街。実際にスラム街に立ち入れば、そこからリアルに見て取れる住民の暮らしぶり。そして、家(滞在先)に帰れば、掃除洗濯を済ませたメイドさんが、冷たい飲み物を持ってきてくれる。勿論、私の気付かない場所で、目に見えない場所で、もっと過酷な状況を必死に生き抜いている人々が、想像出来ない位たくさんいる。

そのような人々よりも自分の方が、経済的に上に位置しているのは明らかである。だからと言って、彼らに対して傲慢な態度を取ってはいないだろうか？ 富裕層の友人たちへの接し方と比べて、差別意識を持ってはいないだろうか？ 感謝の心をきちんと伝えられているだろうか？ 簡単に傲慢になり得る環境に自分の身を置き、自分の人間性が試されている、と私は感じる。

感謝の気持ちを伝えること。ある時は、炎天下で一生懸命リキシャを引っ張ってくれたリキシャブラーのおじさんに、自分のリュックサックからペットボトルの水を取り出して差し出した。ある時は、全身マッサージをしてくれたマッサージ師のおばあさんに、お礼に肩もみをしてあげた。バナナシに旅行した時には、1時間も8人乗りのボートを漕ぎ続けてくれたお兄さんに、チャイを買ってきて一緒に飲んだ。

感謝したくて物をあげるのと、貧しい人を見て可哀想だからと物をあげるのでは、全く違う。後者を私は絶対に

しないと決めている。私が最も辛いことは、道端で会う物乞いの子どもに手を差し出され、「何もあげないよ」と答える時。子どもは一度や二度では諦めずにしばらく付いて来るが、私は歩き続ける。子どもと会話したり、手をつないで遊んだりしながら10分以上一緒に歩いていることもある。もし他の人が同じ状況にあったなら、現地の人でも旅行者でも大抵の場合は、最初の段階で1ルピーを与えるか追っ払うかのどちらかだろう。しかし、金品を期待されているのは痛いほど伝わってくるが、私は絶対に何もあげない。それは、今回インドへ渡った目的でもある卒論で、ストリートチルドレンをテーマに扱い、彼らを取り巻く状況を知ってきたからなのかもしれない。

ストリートチルドレンの中でも物乞いに関してよく言われることの一つに、“物乞いにはお金を与えてはいけない”というものがある。単に、彼らの自立を妨げるから、という理由からだけではない。ストリートチルドレンの多くは、身の安全を守るため、路上のグループに属している。彼らの稼ぎ道は、物乞い、物売り、ゴミ拾い等様々であるが、中でも物乞いの子どもたちは、最年長のグループリーダーから、一人ひとり物乞いをする担当の区間、時間が、シフト制のように割り当てられている。例えば“朝8時から、ここの信号からあそこの曲がり角まで、昼からは、...”といった具合に。そして、物乞いの子どもも他の職業の子どもも、稼いだお金のうち大半はグループリーダーと(親のいる子どもは)親に夕方回収されてしまう。手元に残った僅かな収入は、大抵は一食分にも満たない。その僅かな小遣いで空腹を紛らわしてくれるもの＝ドラッグに手が伸びる。こうして、日々の稼ぎはその日のうちに消費され、貯金に回されることはない。貯金しようにも、路上での生活ではプライバシーが全くなく、横取りも盗みも日常茶飯事のため、どんなに工夫を凝らしてもお金の隠し場所を確保することは難しい。

小さくて痩せ細り、いかにも哀れに見えるような容姿の子どもの方が、物乞いで稼ぎやすい。そこで、物乞いを子どもにさせる親は、わざと子どもに十分な食事を与えないというケースもある。そして、皮肉なことに、そういう子どもの方が、今の生活が苦ではないと言う。理由を聞けば、「手を差し出せば簡単に1ルピーが溜まるから」。この実態を知らない人々が「哀れな子どもたちが食糧を買う足しに」と一時の親切心から1ルピーを与えることが、いかに残酷で、子どもの能力や可能性というものを蝕んでいるのかがよく分かる。

そのような理由で、私は、物乞いに1ルピーをあげたことはない。ところが、正直を言うと、辛い思いをしてまで1ルピーをあげることを我慢しているのにも関わらず、果たして私の取っている行動が本当に正しいのかどうか、実は自信を持てずにいる。この行動は、本当に子どもたちのためを思って取っているのか？1ルピーを与えても、彼らのためにならない、では、逆にそれを与えなかったら、自分は彼らのために何かをしたことになるのか？日本へ帰国してから、その分を募金に回したのか？彼らのために何か行動を起こしたのか？もしかすると、“彼らのためにならないから”とは、1ルピーを与えたいが我慢する、という自分の行動を正当化するための単なる理由付けでしかないのではないのか？葛藤が生じて止まないが、それでも、1ルピーを与えて喜んでもらうのは自己満足にしか過ぎなくて、そんな喜ばせ方で、彼らを物乞いに依存した人生に縛り付けるような手助けをしたくない、と本気で思う。

ここでは省略したが、インドの貧困問題、格差社会問題は、歴史や、宗教や、文化、そしてそれらが築きあげてきた人々の価値観が、外部の人間の想像以上に複雑に絡み合っていて奥が深く、決して“これが最も適切な解決法だ”、等と容易く断言できるものではない。いつか解決できるのかどうか、正直言って私にとっては疑わしい。ただ、どんなお偉いさんも貧乏さんも皆平等(というのは現実的に無理があるので、)、少なくとも私は、どんな貧乏さんも私と平等な人間だということを、忘れずにいなければならない、と思う。

もし、この文章を読んで下さっている方が、今後インド(に限らず、発展途上の国や地域)を訪れる機会があるのなら、ぜひ、貧しい人々に対してどのような接し方をするのか、ご自分の考えをしっかりと持っていていただきたい。空腹に耐えている子どもに路上で手を差し出された時、コインを与えて喜ばせてあげたい気持ちは痛いほどよく分かる。しかし、もしもそれを与えるなら、そのお金がその子どもの人生にどう影響してしまうのか、それでも与える価値のあるものかどうか、1人1人その都度判断していただきたい。自己満足のためだけにその場限りで親切に接することは、私の考えにもし共感できる部分が少しでもあったならば、子どものためを考えてぐっと我慢していただきたい。

貧困問題、格差問題—。1人の旅行者にとっては太刀打ちできず、どうしようもないもの。だから、大切なのは、そこで出会う人間1人1人の背後にあり得る問題を直視し、自分はどう向き合うのか、自分なりの軸をしっかりと持つこと。途中、その軸に変化があるかもしれない。それでもいい。そして、日本に帰国してからも、或いは地球の何処にいても、今度また自分の周りで起こる問題に、その軸を持って向き合っていけばいい。

そんなことを学び、自分の軸が少し太くなり、性格もインド人に影響されてかまた少し図太くなった気がした、2度目のインド旅行だった。

6. 新刊書紹介

『知られざるインド』- 儀礼芸能とその造形-

沖守弘・小西正捷共著（お二方とも日印協会会員）

清流出版刊

定価 本体 3,800 円 + 税

複雑な社会構造、種々の神話と宗教、様々な人々が共存する複合文化、多様な民族が渦巻く未知の国インド。



『インド グローバル化する巨像』

堀本武功著（日印協会理事）

岩波書店刊

定価 本体 1,600 円 + 税

21 世紀に入ってインドは急速に存在感を増しつつある。特に高い成長率を支える IT 革命は世界的に注目の的であるが、その一方で農民の自殺者が増え、貧富の差が拡大していると言われる。グローバル化の中でインドはどのように変わりつつあるのか。急成長する経済の実態、政治、外交、軍事、社会の変化、日本との関係を基本的なデータに基づいて検証しながら、インドの未来を探る。現代インドのトータルをトータルに描く入門書。



『インドを知る事典』

山下博司・岡本信子共著

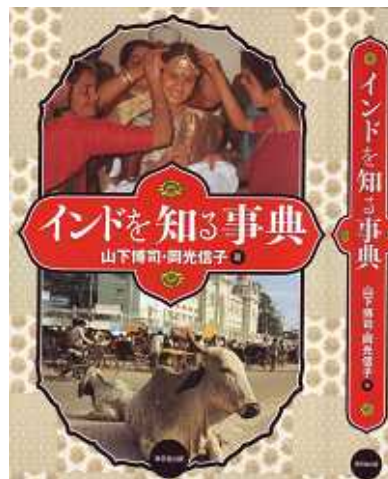
東京堂出版刊

定価 本体 2,800 円 + 税

世界が注目するインドを総合的にまとめた初の入門事典

インドの人口は現在 10 億を超え、未来の経済大国として各国から注目されている。本書は、そのインドの歴史や宗教をはじめ、「衣」、「食」、「住」からインド独自の習慣、暮らし、産業、環境、ファッション、交通事情や旅行の心得まで細部にわたり詳細に紹介している。文化現象、社会現象をインドの歴史をふまえながら総合的に解説したはじめての入門事典と言える。インドの最新情報も提供されているのでインドへの旅行やインドでの生活をするために、またビジネスにも役

立つおおすすめの事典である。



7. 日印貿易概況

2007年5月 及び 6月

(単位：100万円)

輸 出 総 額 (日本 → インド)	2007/5月 52,761	2007/6月 59,006	輸 入 総 額 (インド → 日本)	2007/5月 48,862	2007/6月 39,428
食 料 品	29	14	食 料 品	5,112	4,617
原 料 品	556	877	魚介類	2,695	2,282
鉱 物 性 燃 料	554	11,894	(えび)	1,522	1,367
化 学 製 品	5,415	6,807	肉類	-	-
有機化合物	1,494	2,231	穀物類	12	15
医薬品	238	336	野菜	23	25
プラスチック	1,735	1,717	果実	352	485
原 料 別 製 品	11,266	13,237	原 料 品	9,093	8,786
鉄鋼	7,858	8,767	木材	13	6
非鉄金属	435	549	非鉄金属鉱	289	680
金属製品	1,300	1,489	鉄鉱石	6,275	5,593
織物用糸・繊維製品	606	615	大豆	-	-
非金属鉱物製品	392	503	鉱 物 性 燃 料	1,555	11,912
ゴム製品	480	1,143	原油及び粗油	-	-
紙類・紙製品	196	167	石油製品	1,555	11,912
一 般 機 械	16,664	17,497	(揮発油)	1,555	11,912
原動機	2,065	2,131	石炭	-	-
電算機類(含周辺機器)	145	242	化 学 製 品	3,147	3,076
電算機類の部分品	124	195	有機化合物	1,513	1,780
金属加工機械	3,014	3,038	医薬品	210	138
ポンプ・遠心分離器	1,381	1,573	原 料 別 製 品	9,352	6,125
建設用・鉱山用機械	824	970	鉄鋼	3,415	639
荷役機械	1,097	1,286	非鉄金属	157	238
加熱用・冷却用機器	939	483	金属製品	181	170
繊維機械	3,068	2,800	織物用糸・繊維製品	1,603	1,402
ベアリング	265	325	ダイヤモンド加工品	3,556	3,337
電 気 機 器	7,446	8,734	貴石及び半貴石加工品	94	29
半導体等電子部品	989	997	その他非金属鉱物製品	192	176
(I C)	442	347	木製品等(除家具)	9	9
映像機器	269	206	一 般 機 械	1,291	972
(映像記録・再生機器)	221	135	原動機	165	105
(テレビ受像機)	48	71	電算機類(含周辺機器)	3	5
音響機器	3	4	電算機類の部分品	8	8
音響・映像機器の部分品	15	32	電 気 機 器	1,770	1,237
重電機器	866	750	半導体等電子部品	51	55
通信機	925	1,724	(I C)	51	53
電気計測機器	1,253	1,190	音響映像機器(含部品)	8	1
電気回路等の機器	1,367	1,787	(映像記録・再生機器)	-	-
電池	48	34	重電機器	502	194
輸 送 用 機 器	4,882	5,070	通信機	13	1
自動車	1,077	1,171	電気計測機器	40	33
(乗用車)	1,077	1,156	輸送用機器	387	273
(バス・トラック)	-	15	自動車	12	13
自動車の部分品	3,738	3,815	自動車の部分品	367	248
二輪自動車	3	-	航空機類	-	-
船舶	-	-	そ の 他	3,154	2,430
そ の 他	5,949	4,876	科学光学機器	28	23
科学光学機器	1,187	1,381	衣類・同付属品	1,922	1,562
写真用・映画用材料	765	995	家具	23	19
記録媒体(含記録済)	416	415	バッグ類	112	82

0 は表示単位に満たないもの - はデータ無しもの 日本関税協会『外国貿易概況』『日本貿易月表』

8. 掲示板

インドへのアプローチ

先月号でも案内したが、日に日に日本からのインドへのフライトが便利になった。前述したように、JAL がこの 10 月 28 日より、デリーへ毎日運行することになり、旅行者、ビジネスマンに限らず、旅行に幅がもてるようになり、かつ選択肢が多くなった。ちなみに 10 月末からの各社（直行便を持つ航空会社）のフライトスケジュールを紹介する。

日本航空 (JAL)

東京 - デリー便	東京発 11:00	デリー着	17:30	毎日運行
デリー - 東京便	デリー発 19:50	東京着	翌日 06:45	毎日運行

全日本空輸 (ANA)

東京 - ムンバイ便	東京発 15:50	ムンバイ着	19:05	水曜日を除く週 6 便
ムンバイ - 東京便	ムンバイ発 20:15	東京着	翌日 8:45	水曜日を除く週 6 便

エアインディア (AI) ……東京/大阪発はデリー経由でムンバイまで、また、ムンバイ発デリー経由にて東京/大阪まで

東京 - デリー便	東京発 12:00	デリー着	16:55	水、木、土、日の 4 便
デリー - 東京便	デリー発 17:40	東京着	翌日 08:00	火、水、金、土の 4 便
大阪 - デリー便	大阪発 14:00	デリー着	21:00	水、土、日の 3 便
デリー - 大阪便	デリー発 17:40	大阪着	翌日 12:35	火、金、土の 3 便

近藤教授より最新のインド地図の寄贈

日印協会の理事である、国際基督教大の近藤教授より、研究のためにインドへ行かれた折に購入された、最新のインド地図を寄贈いただいた。有難うございました。

会員の皆さんにて活用下さい。

前述のナマステ・インド 2007 記念講演には早速に使わせていただいた。

『インド季報』 4 月～6 月号が刊行

インドの情報を専門的に編纂した季刊誌『インド季報』（4 月～6 月号）が発刊されました。個人会員の方でより深くインド情報を必要とされている方は、購入下さい。また、法人会員には 1 冊無料にて配布しておりますが、さらにコピーが必要な方はご連絡下さい。特別価格にて、ご購入できます。

チラシ同封規定の改定

この『月刊インド』の発行時に、イベント紹介、新刊紹介、文化紹介、ビジネス紹介などにチラシを同封して、種々の活動に利用いただいているが、最近同封チラシの量が多くなってきていることと、同封作業にボランティアをお願いしているが、なかなか人出が集まらず、作業が停滞気味です。スムーズに予定通りに発刊するため、同封作業に関わる費用を見直しましたので、恐縮ながら、ご協力をお願いします。詳細は同封資料を参照願いますが、会員優先のため、非会員の同封は一枚当たり 20 円、ボランティアとしてお手伝いをお願いしていますが、事情によりお手伝いが難しい場合は、一枚あたり 20 円を申し受けます。

なお、10 月刊行分は、600 部を予定しています。

編集後記

インドでは、僅かな小山すらのハイキングなどしたことがない。況してや霊峰をいただきながらの本格的登山などまるで縁がなかった。インドであつたらどうかと想像しながら、先日新潟県の中越山岳にハイキングに多少の毛の生えた山登りの真似事をやってみた。広く世に知られた場所と異なり、ごく限られた登山家、或いはハイカーが行く所らしい。幸い天気にも恵まれ、歩くには適当な環境であつた。暑くなく寒くなく、さほどの装備もなく、しかし、山歩きの経験もないので、ただひたすらに歩いた。獣道のような道ではあつたが、ブヨに行く道を妨げられ、トンボに道案内をされ、時々に出てくる蛇に吃驚しながら、木々の間から見える、真っ青な空にそびえ立つ山(名前は全くわかりませんが)に見とれながら、気持ちよく、普段の喧騒を忘れて、自然にどっぷりと浸ったものである。心地よい汗をぬぐいながら、人手の付いていない自然とは、こんなに素晴らしいものなのかと改めて感銘していた。

ところがである。ふと目を転ずると、道の片隅に、文明の破片が在るではないか。食べ物のかすやら包装紙などが微かに落ちている。意図的に落としたのではないと考えたいが、一気に現実に引き戻されてしまった。何時までも自然を残しておいて貰いたい日本ではあるが、頭を過ぎったのは、インドではどうなのだろうかとの思いであつた。著名な登山家が、インドでの(或いはネパールでの)、登山に関わったゴミが多いと指摘している。清潔度と潔癖度、公共性は上位に位置するであろう日本にしてこのような状態であれば、些か低位のインドにおいてはおしてしかるべきか。

今回の会報『月刊インド』の発送

11月の発送は16日(金)の予定です。

協会会員に呼びかけたいインドに関する各種お知らせを、チラシにして封入しませんか。なお、11月は月半ばの発送予定ですので、催事広報のためにチラシ封入をお考えの方は、この期間の発送予定日を参考にしうえでお申込み下さい。

～ 日印親善の輪を広げよう ～

法人会員・個人会員としてご入会ください

日印協会は法人・個人の会費を主な財源として日印友好促進のため活動を続けております。協会の主旨(日印相互理解を基礎に、両国の親善を増進する)に賛同していただける法人・個人であれば、規模の大小・職業・年齢・性別を問わずご入会を歓迎致します。特典としては会報『月刊インド』の無料配布のほか各種催し物・会合のご案内、ご招待、旅行・ヨガクラス・語学講座等の優待、図書・テープ・ビデオの貸出し、日印交流事業への優先参加等があり、会員証(更新については希望者のみ)を発行致します。法人会員に対しては上記の他、政治・経済関係報告書の郵送及び日印経済懇話会(社会・経済の勉強会)へのご案内を致します。

年会費:個人	6,000 円/口	入会金:個人	2,000 円
学生	3,000 円/口	学生	1,000 円
一般法人会員	100,000 円/口	法人	5,000 円
維持法人会員	150,000 円/口	(一般、維持法人会員共に)	



財団法人 日 印 協 会 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階

ホームページ: <http://www.japan-india.com/>

電話: 03-5640-7604 Fax: 03-5640-1576 E-mail: partner@japan-india.com

E-mail アドレスを変更しました。

